

改革…そして幻滅の日本史

朝日新聞
12(H24)
12.3

熱狂がすぐ幻滅に変わった民主党政権誕生は3年3カ月前。自民党の「次なる総理」は5年3カ月前に涙目の辞任会見で政権を放り出して失望させた人。第三極の総理候補は、日中経済に最悪の影響を出した責任を指摘されながら、勇ましい発言を止めないお方。4日に公示される衆院総選挙は異例の政党分立となっている。それもこんな「幻滅選挙」なればこそではないか。少し引いた歴史の目で「改革と幻滅の日本史」を考えた。

時は幕末。黒船来航に揺れる江戸で、けなげに生きる貧しい3姉妹の活躍を描いたチャンバラミュージカル「幕末スープレックス」は、劇団・子供鉦人の喜劇。舞台は江戸時代だが、グローバリゼーションや雇用不安まで、現代を



破天荒な演出で笑いを取った子供鉦人の舞台「幕末スープレックス」=橋本大和氏撮影

すぐに変わるなんて甘い幻想

映し込んだ時代劇でもある。3姉妹ら登場人物は、徳川政権倒幕の新政権への、期待と幻滅に翻弄される。

「薩摩藩などの新政権が甘言を弄して民衆を扇動、いざ事が成るとあっさり蹂躪するのは、歴史的にみてそんなに珍しいことではない」と演出の益山貴司さんは話す。

史実はどうなのか。宮地正人・東京大名誉教授は『幕末維新変革史』をこの秋に出版。「王政復古(1868年)で改革が一挙に成った」という一般のイメージを払拭した。

「明治初年は江戸時代よりも一揆の規模が拡大している。廃藩置県で賦役や年貢も大幅に軽減される。農民がその想像したのは自然だ。新政府軍もそうした幻想をうまく利用して政権交代に成功した。しかし、新政府は外国との競争で以前に増してカネが必要で、民衆の期待は裏切られた」(宮地さん)

いつの世も政権交代への期待は甘い幻想を生むが、「生活は段階的にしか変えられない

い。数年ですべてが変わる改革などありえない。明治維新の政治家も実際の政策で微修正を繰り返して、二歩前進一歩後退で漸進させていった。それが改革の本領でしょう」。

東京大史料編纂所の本郷和人教授(日本中世史)は、先月出した『戦いの日本史』で、後醍醐天皇による建武の「政権交代」を考察した。

スーパーヒーロー後醍醐天皇に心酔した楠木正成ら忠臣が、命がけて鎌倉幕府の武家政権から朝廷に権力を取り戻した——というのが物語などでなれ親しんだ「お話」だが、本郷さんによれば、この政権交代の本質は「不動産と動産の戦いだった」という。

「鎌倉幕府は質実剛健な御家人中心の不動産政権。対して時代の趨勢は、商品の流通が加速する動産の貨幣経済へ。正成ら新興の『悪党』が、御家人重視の幕府に不満を募らせた」

後醍醐天皇が武士たちの支持を集めて樹立した新政権だが、わずか3年足らずで崩壊。「後醍醐天皇は武士が不満を持っていることは分かっていた。しかし時代の流れの根幹を理解していなかった」。歴史に学ぶべき教訓があると

すれば、「世間の不満を利用するだけの勇ましい人には任せちゃいけない、ということでしょうか」(本郷さん)。

宮地さんは「幕末の民衆はレベルが高かった」と言う。「手紙や刷物など政治情報を伝達する行為自体、権力者から弾圧を受けて死罪の可能性もあった。しかし自分たちで必死に情報を集めた。民衆は、幕府がいいのか薩長がいいのか、何が事実で何がデマなのか、自分たちの頭で自律的に考え判断した。地方の名望家は、時代のためによく判断した活動家」武士にカネを与え支持した。大変革を成し遂げ自由民権運動にまでつなげたのは、維新の英雄たちではない。自律した人民です」

「改革と幻滅はワンセット」とは、むしろ当たり前の史実だった。そして、民衆が幻滅することで好転することはないという点も、歴史が教える当たり前の教訓だ。

(近藤康太郎)

